



知られざる

# Oracle Database 12c の新機能

有償オプションを購入しなくても使える便利な新機能

篠田典良 / 日本ヒューレット・パッカード株式会社 / 2014年9月7日

# 自己紹介

篠田 典良(しのだ のりよし)

- ・ 所属
  - 日本ヒューレット・パカード株式会社 コンサルティング事業統括
- ・ 経歴
  - 1990年 日本デジタルイクイップメント株式会社
  - 2000年 日本ヒューレット・パカード株式会社
- ・ 現在の業務
  - Oracle Database, Microsoft SQL Server, PostgreSQL, Vertica等 RDBMS全般に関するシステムのデリバリー、コンサルティング等
  - オープンソース製品に関する調査、検証
  - Oracle Database関連書籍の執筆



# Agenda

## 知られざるOracle Database 12cの新機能

- ・ 列データ型の制限拡張
- ・ IDENTITY列
- ・ FETCH N ROWS ONLY
- ・ In-Database Archiving
- ・ SEQUENCEの拡張
- ・ 非表示列
- ・ オンライン操作
- ・ マルチスレッド・インスタンス
- ・ PGA制限
- ・ Unified Auditing
- ・ Patch Set 12.1.0.2 情報



# 列データ型の制限拡張



# 列データ型の制限拡張

データ型の最大バイト数の上限が変更

列データ型と PL/SQL データ型の制限 (単位: バイト)

データ型	Oracle Database 11 <i>g</i> 列最大長	Oracle Database 11 <i>g</i> PL/SQL最大長	Oracle Database 12 <i>c</i> 列最大長
CHAR	2,000	32,767	2,000
NCHAR	2,000	32,767	2,000
VARCHAR2	4,000	32,767	32,767
NVARCHAR2	4,000	32,767	32,767
RAW	2,000	32,767	32,767



# 文字列型の最大サイズ拡張

## 変更手順

**注意！一度変更すると元に戻せません**

標準では無効になっているため、変更が必要。

以下の手順で設定を変更する。

```
$ sqlplus / AS SYSDBA
SQL> STARTUP UPGRADE
SQL> ALTER SYSTEM SET max_string_size = EXTENDED ;
SQL> @?/rdbms/admin/utl32k.sql
SQL> SHUTDOWN IMMEDIATE
SQL> STARTUP
```



# 文字列型の最大サイズ拡張

## 実行例

```
SQL> CREATE TABLE large1 (col1 VARCHAR2(8192), col2 RAW(32767)) ;
```

表が作成されました。

```
SQL> DESCRIBE large1
```

名前	NULL?	型
----	-------	---

COL1		VARCHAR2(8192)
------	--	----------------

COL2		RAW(32767)
------	--	------------

# 文字列型の最大サイズ拡張

## 実体は？

制限が拡張された列の実体は、インライン格納方式のBLOB型（拡張データ型と呼ばれる）。物理フォーマットは格納表領域のタイプと初期化パラメータdb\_securefileに依存する。

```
SQL> CREATE TABLE large2(col1 VARCHAR2(32767)) ;
```

表が作成されました。

```
SQL> SELECT OBJECT_NAME, OBJECT_TYPE, GENERATED FROM USER_OBJECTS ;
```

OBJECT_NAME	OBJECT_TYPE	GENERATED
SYS_IL0000080866C00001\$\$	INDEX	Y
SYS_LOB0000080866C00001\$\$	LOB	Y
LARGE2	TABLE	N

\* インライン格納方式 = 4,000バイトまでのデータはテーブルと同一セグメントに格納する。4,000バイトを超えるデータはLOBセグメントに格納される。





# 文字列型の最大サイズ拡張

## インデックスを作成する

インデックスは作成できるが以下の制限あり

- ・ 列サイズが「ブロック・サイズ × 75% - オーバーヘッドまで」の制限は変更なし
- ・ 内部的にはファンクション索引が作成されるようだが、ALL\_IND\_EXPRESSIONSビューには格納されない。

Id	Operation	Name	Rows	Bytes	Cost (%CPU)	Time
0	SELECT STATEMENT		1	21	2 (0)	00:00:01
* 1	TABLE ACCESS BY INDEX ROWID BATCHED	LARGE1	1	21	2 (0)	00:00:01
* 2	INDEX RANGE SCAN	IX1_L1	1		1 (0)	00:00:01

Predicate Information (identified by operation id):

- 1 - filter (INTERNAL\_FUNCTION ("LARGE1". "COL1"))
- 2 - access ("COL1"=' Data1')  
filter (INTERNAL\_FUNCTION ("COL1"))



# 文字列型の最大サイズ拡張

LOBを使わない方法はないのか？

```
SQL> CREATE TABLE large2 (col1 VARCHAR2(1)) ;
```

表が作成されました。

```
SQL> ALTER TABLE large2 MODIFY (col1 VARCHAR2(32767));
```

表が変更されました。

```
SQL> SELECT OBJECT_NAME, OBJECT_TYPE FROM USER_OBJECTS ;
```

OBJECT_NAME	OBJECT_TYPE
-------------	-------------

LARGE2	TABLE
--------	-------

または初期化パラメータ `_scalar_type_lob_storage_threshold` を変更する。



# IDENTITY列



# IDENTITY列

## テーブル列に一意な値を自動設定する機能

- ・ SQL Server (IDENTITY属性), PostgreSQL (serialデータ型), MySQL (AUTO\_INCREMENT属性) 等, 他のRDBMSでは一般的な機能。Oracle Database 12cでやっと採用。
- ・ 自動採番された値をユーザーが更新(UPDATE / INSERT)できるかどうかを選択することができる。
  - SQL Serverは IDENTITY指定列のUPDATE不可(INSERTは属性により可)
  - PostgreSQLはserial列のUPDATE/INSERT可
- ・ CREATE TABLE文の列指定にSEQUENCEオブジェクトと同じ属性を指定可能。
- ・ 対象列にはNOT NULL制約が自動的に付与される。
- ・ NULL値を格納しようとした場合に、エラーになるか採番された値を格納するかを指定可能。



# IDENTITY列

## 使用例#1 更新不可能列として作成

```
SQL> CREATE TABLE idtbl1 (id NUMBER GENERATED ALWAYS AS IDENTITY,  
                             val VARCHAR2(10));
```

```
SQL> INSERT INTO idtbl1 VALUES ('Value1');
```

ORA-00947: 値の個数が不足しています。

```
SQL> INSERT INTO idtbl1 VALUES (DEFAULT, 'Value1');
```

1行が作成されました。

```
SQL> UPDATE idtable1 SET id = 2;
```

ORA-32796: **GENERATED ALWAYS**で作成されたアイデンティティ列は更新できません

# IDENTITY列

使用例#2 更新可能列として作成(開始番号を 10 に指定)

```
SQL> CREATE TABLE idtbl2 (id NUMBER  
    GENERATED BY DEFAULT AS IDENTITY (START WITH 10), val VARCHAR2(10)) ;  
表が作成されました。
```

```
SQL> INSERT INTO idtbl2 (val) VALUES ('Value2') ;  
1行が作成されました。
```

```
SQL> UPDATE idtbl2 SET id = 200 ;  
1行が更新されました。
```



# IDENTITY列

実体は自動生成されるSEQUENCEオブジェクトとDEFAULTの組み合わせ

- ・ 利用するためにはCREATE SEQUENCEシステム権限が必要
- ・ 自動生成されたSEQUENCEオブジェクトの属性変更はALTER TABLE文で実行
- ・ INSERT文がエラーになっても自動生成される番号は更新される。

```
SQL> CREATE TABLE idtable1 (col1 NUMBER GENERATED ALWAYS AS IDENTITY) ;
```

表が作成されました。

```
SQL> SELECT OBJECT_NAME, OBJECT_TYPE, GENERATED FROM USER_OBJECTS ;
```

OBJECT_NAME	OBJECT_TYPE	GENERATED
-----	-----	-----
IDTABLE1	TABLE	N
ISEQ\$\$_92462	SEQUENCE	Y



# IDENTITY列

## 情報の参照と操作

- ・ ALL\_TAB\_IDENTITY\_COLSビュー追加。ALL\_TAB\_COLUMNSビュー更新。
- ・ 自動生成されたシーケンス・オブジェクトは削除できないが、NEXTVAL操作は実行可能

```
SQL> SELECT COLUMN_NAME, GENERATION_TYPE, IDENTITY_OPTIONS FROM  
        USER_TAB_IDENTITY_COLS WHERE TABLE_NAME='IDTABLE1' ;
```

```
COLUMN_NAME  GENERATION_  IDENTITY_OPTIONS
```

```
-----  
COL1         ALWAYS      START WITH: 1, INCREMENT BY: 1, MAX_VALUE:  
                                           99999999999999999999999999999999, MIN_VALUE: 1, ...
```

```
SQL> SELECT ISEQ$$_92462.NEXTVAL FROM DUAL ;
```

```
NEXTVAL
```

```
-----  
2
```





# IDENTITY列

## DEFAULTとSEQUENCEの組み合わせ

- ・ 列値のDEFAULT指定にシーケンスを指定できるようになった。
- ・ 依存関係はチェックされていないので、シーケンスを削除することができる。

```
SQL> CREATE SEQUENCE seqdef1 ;
```

順序が作成されました。

```
SQL> CREATE TABLE tabdef1 (col1 NUMBER DEFAULT seqdef1.NEXTVAL, col2 CHAR(8)) ;
```

表が作成されました。

```
SQL> DROP SEQUENCE seqdef1 ;
```

順序が削除されました。

```
SQL> INSERT INTO tabdef1 (col2) VALUES ('data') ;
```

**ORA-02289: 順序が存在しません。**



# FETCH N ROWS ONLY



# FETCH N ROWS ONLY

順序付けられた途中のレコードを抜き出し

- ・「先頭から10レコード」、「6番目から5レコード」の検索
  - Oracle Database 11gまではROWNUM疑似列またはROW\_NUMBER関数を使う必要があった。

Oracle Database 11gまでの記述例

```
SELECT first_name, last_name, salary FROM (  
  SELECT first_name, last_name, salary,  
    ROW_NUMBER() OVER (ORDER BY salary DESC)  
      ranking FROM employees)  
WHERE ranking BETWEEN 6 AND 11
```



# FETCH N ROWS ONLY

## Oracle Database 12cの新構文

### Oracle Database 12cの記述例

```
SELECT first_name, last_name, salary FROM employees ORDER BY salary DESC  
      OFFSET 5 ROWS FETCH NEXT 6 ROWS ONLY
```

- ・ OFFSET句を省略すると、先頭の指定数レコードを抽出可能。
- ・ FETCH句を省略すると、OFFSET指定した先頭レコード以外の全レコードを出力。
- ・ FIRSTとNEXTは同じ意味、ROWSとROWも同じ意味。
- ・ レコード数以外に、PERCENT指定、同値の値を出力する WITH TIES指定も可能。
- ・ 記述例
  - FETCH **FIRST** 5 ROWS ONLY
  - OFFSET 5 ROWS FETCH NEXT 5 **PERCENT** ROWS ONLY
  - OFFSET 5 ROWS FETCH NEXT 5 ROWS **WITH TIES**



# FETCH N ROWS ONLY

実体はROW\_NUMBER関数への書き換え

実行計画を確認

```
SQL> EXPLAIN PLAN FOR SELECT * FROM employees ORDER BY salary DESC  
      OFFSET 5 ROWS FETCH NEXT 6 ROWS ONLY ;  
SQL> SELECT * FROM TABLE(DBMS_XPLAN.DISPLAY) ;
```

・内部的には、サブクエリー、ROW\_NUMBER関数とCASE句を実行している。

```
1 - filter("from$_subquery$_002"."rowlimit_$$_rownumber"<=CASE WHEN  
      5>=0) THEN 5 ELSE 0 END +6 AND rom$_subquery$_002"."rowlimit_$$_rownumber"> 5)  
2 - filter(ROW_NUMBER() OVER ( ORDER BY INTERNAL_FUNCTION("SALARY") DESC )  
      <=CASE WHEN (5)>=0) THEN 5 ELSE 0 END +6)
```



# FETCH N ROWS ONLY

## 制限事項

- ・ FOR UPDATE句と一緒に使えない。
- ・ シーケンスと一緒に使えない。



# In-Database Archiving



# In-Database Archiving

## 不要データを論理的に不可視にする機能

- ・ テーブル内にデータは格納したままでレコードを不可視 (=Archiving) にできる。
  - SQL文のWHERE句の変更不要
- ・ 機能を利用するテーブルにはCREATE | ALTER TABLE **ROW ARCHIVAL**文を実行。
  - **ORA\_ARCHIVE\_STATE**非表示列が利用できるようになる。ALL\_TAB\_COLUMNSビューには表示されないが、ALL\_TAB\_COLSビューでは確認できる。
  - ORA\_ARCHIVE\_STATE列値を '0' (0x30) 以外に設定した列は、WHERE句の条件から自動的に外れる。
- ・ アーカイブされたレコードを参照方法も提供される。
  - ALTER SESSION SET ROW ARCHIVAL VISIBILITY文で可視条件を変更可能。





# In-Database Archiving

使い方: 対象レコードをアーカイブ化

```
SQL> ALTER TABLE employees ROW ARCHIVAL ;
```

表が変更されました。

```
SQL> SELECT COUNT(*) FROM employees ;
```

```
COUNT(*)
```

```
-----
```

```
107
```

```
SQL> UPDATE employees SET ORA_ARCHIVE_STATE = '1' WHERE employee_id = 202 ;
```

1行が更新されました。

```
SQL> SELECT COUNT(*) FROM employees ;
```

```
COUNT(*)
```

```
-----
```

```
106
```



# In-Database Archiving

使い方: アーカイブ化されたレコードを参照

```
SQL> ALTER SESSION SET ROW ARCHIVAL VISIBILITY = ALL ;
```

セッションが変更されました。

```
SQL> SELECT COUNT(*) FROM employees ;
```

```
COUNT(*)
```

```
-----
```

```
107
```

```
SQL> ALTER SESSION SET ROW ARCHIVAL VISIBILITY = ACTIVE ;
```

セッションが変更されました。

```
SQL> SELECT COUNT(*) FROM employees ;
```

```
COUNT(*)
```

```
-----
```

```
106
```



# In-Database Archiving

## 実行計画

```
SQL> EXPLAIN PLAN FOR SELECT * FROM employees ;
```

解析されました。

```
SQL> SELECT * FROM TABLE(DBMS_XPLAN.DISPLAY);
```

PLAN\_TABLE\_OUTPUT

-----							
Id	Operation	Name	Rows	Bytes	Cost (%CPU)	Time	
-----							
0	SELECT STATEMENT		1	69	3 (0)	00:00:01	
* 1	TABLE ACCESS FULL	EMPLOYEES	1	69	3 (0)	00:00:01	
-----							

1 - *filter("EMPLOYEES"."ORA\_ARCHIVE\_STATE"='0')*

# In-Database Archiving

## 注意点

- ・ 仮想的にレコードを不可視にしているだけであり、制約は有効。
  - SELECT文を実行して条件に一致したレコードが存在しないのに、INSERT文で一意制約違反という事態がありうる。
- ・ ROW ARCHIVAL指定されたテーブルには1バイト列が複数追加。
  - **ORA\_ARCHIVE\_STATE**列 (VARCHAR2(1)型) = 指定された値を保存
  - **SYS\_NC[99999]\$**列 (RAW(1)型) = 用途不明 (CREATE TABLE時は作成されない)。
  - ROW ARCHIVALを指定を指定したテーブルは列数の制限が小さくなる。
- ・ 使用を解除する場合はALTER TABLE NO ROW ARCHIVAL文を実行。
  - 該当テーブルから列を削除する処理を行う (ALTER TABLE DROP COLUMNと同じ)。
  - 大規模テーブルで実行する場合には I/Oに注意。



# SEQUENCEの拡張



# SEQUENCEの拡張

シーケンス・オブジェクトの拡張(一部ドキュメント上に存在しない)

- ・ CREATE SEQUENCE sequence\_name **SESSION**
  - セッション単位で初期化されるシーケンス。
  - 永続化されない。
  - SESSIONの代わりにGLOBALを指定するか省略すると従来のシーケンスとなる。
  - SQL\*Loader の制御ファイルに使用可能、使用方法は従来と同じ。
  - SQL Referenceマニュアルは何を言っているのかわからない。
- ・ CREATE SEQUENCE sequence\_name **KEEP | PARTITION** number
  - 用途不明。
  - ALL\_SEQUENCESビューのPARTITION\_COUNT列、KEEP\_VALUE列に反映。
- ・ ALL\_SEQUENCESビューの拡張
  - PARTITION\_COUNT, SESSION\_FLAG, KEEP\_VALUE列が追加。



# 非表示列



# 非表示列

## 存在しないように見える列

- ・ DESCRIBEコマンドや、INSERT文/SELECT \* 文から列を隠す機能。
  - 列にINVISIBLE属性(またはVISIBLE属性)を指定する。
- ・ 明示的に列名を指定した場合は使用可能。
  - INSERT文で列リストを指定 – INSERT INTO table (column1, column2, ...)
  - SELECT文で列リストを指定 – SELECT column1, column2, ...
  - UPDATE文で列名を指定 – UPDATE table SET column1 = value ...
  - WHERE条件で列名を指定 – WHERE column = value ...
- ・ セキュリティ向上目的には使えない





# 非表示列

## 実行例

```
SQL> CREATE TABLE tblinv1 (col1 CHAR, col2 CHAR INVISIBLE, col3 CHAR);
```

表が作成されました。

```
SQL> DESCRIBE tblinv1
```

名前	NULL?	型
C1		CHAR(1)
C3		CHAR(1)

```
SQL> INSERT INTO tblinv1 VALUES ('A', 'B', 'C');
```

ORA-00913: 値の個数が多すぎます。

```
SQL> INSERT INTO tblinv1(col1, col2, col3) VALUES ('A', 'B', 'C');
```

1行が作成されました。



# 非表示列

## 実行例

```
SQL> ALTER TABLE tblinv1 MODIFY (col2 VISIBLE) ;
```

表が変更されました

```
SQL> DESCRIBE tblinv1
```

名前	NULL?	型
COL1		CHAR(1)
COL3		CHAR(1)
COL2		CHAR(1)

- ・ VISIBLEを指定しても列は元の定義位置に戻らず、列定義の最後に追加される。
- ・ 複数のINVISIBLE 列が存在する場合は定義順にソートされる。
- ・ SQL\*PlusでINVISIBLE列を指定する場合は「SET COLINVISIBLE ON」を実行。

# アーキテクチャーの変更と システム管理



# オンライン操作

## ロックを行わないDDL実行

- ・ ONLINE句が指定できるDDLが増加
  - DROP INDEX **ONLINE**
  - ALTER INDEX UNUSABLE **ONLINE**
  - ALTER TABLE SET UNUSED **ONLINE**
  - ALTER TABLE DROP **ONLINE**
  - ALTER TABLE MOVE PARTITION **ONLINE**
  - ALTER TABLE MOVE SUBPARTITION **ONLINE**



# オンライン操作

## ロックを行わずにデータ移動

- ・ データファイルの移動
  - ALTER DATABASE **MOVE DATAFILE** '旧パス' TO '新パス'
  - オフライン化不要、かつ物理ファイル実体の移動まで1文で実行。
  - 内部的にはファイル・コピー＋旧ファイル削除であるため、一時的に2ファイル作成される。
- ・ セグメントの移動
  - ALTER TABLE table\_name MOVE PARTITION partition\_name **ONLINE** ...
  - DMLのロックを行わない。
  - この機能ができたのでADOが利用できる。
  - テーブル／パーティション属性ROW MOVEMENTの設定に依存せずに移動が可能。
  - パーティション内のレコードのROWIDは変更される。



# マルチスレッド

## バックグラウンド・プロセスとサーバー・プロセスのスレッド化と集約

- ・ バックグラウンド・プロセスのスレッド化
  - 初期化パラメータ`threaded_execution`をtrueに設定（デフォルト値 false）（要再起動）
  - インスタンスを以下のプロセスに集約
    - ・ ora\_pmon\_{SID}, ora\_psp0\_{SID}, ora\_vktm\_{SID}, ora\_dbw0\_{SID}, ora\_u004\_{SID}, ora\_u005\_{SID}, ...
- ・ サーバー・プロセスのスレッド化
  - listener.oraファイルのパラメータ`DEDICATED_THROUGH_BROKER_{リスナー名}` をonに設定（デフォルト off）
  - バックグラウンド・プロセスのスレッド化が前提
- ・ 接続時にユーザー名／パスワードが必須になる（connect / as sysdba不可）。



# マルチスレッド

## 実行例

```
$ ps -ef | grep ora_ | grep -v grep
oracle  15316      1  0 18:05 ?        00:00:00 ora_pmon_ORCL1
oracle  15318      1  0 18:05 ?        00:00:00 ora_psp0_ORCL1
oracle  15326      1  1 18:05 ?        00:00:00 ora_vktm_ORCL1
oracle  15330      1  1 18:05 ?        00:00:00 ora_u004_ORCL1
oracle  15336      1  9 18:05 ?        00:00:05 ora_u005_ORCL1
oracle  15342      1  0 18:05 ?        00:00:00 ora_dbw0_ORCL1
```

共有メモリーの構造は変更なし



# PGA制限

## PGAの使用量を一定量に制限する

- ・ 初期化パラメータ`pga_aggregate_limit`に制限値を指定する。
  - 制限を超えると最もメモリー使用量が多い(highest untunable PGA memory)コネクションに対してORA-4036を発生。
  - 値の制限は  $2\text{GB} \sim (\text{物理メモリー} - \text{SGA}) \times 120\%$
- ・ 旧バージョンまでは、初期化パラメータ`pga_aggregate_target`を指定。
  - メモリー使用量は事実上制限できなかった。





# Unified Auditing

## 監査機能の統合

- ・ 従来の標準監査、SYS監査、ファイングレイン監査を統合。
- ・ 標準状態では両方有効 (Mixed Mode) になっている。
  - Unified Auditingのみに設定するにはOracle Databaseプロダクトの再リンクが必要
- ・ 新しい機能
  - CREATE AUDIT POLICY文で監査設定を行う。
  - 監査システム全体の設定はDBMS\_AUDIT\_MGMTパッケージを使用。
  - 監査データの書き込み方法 (同期 / 非同期) を選択可能
    - ・ 書き込みはGEN0バックグラウンド・プロセスが実行
    - ・ 非同期を選択した場合は3秒ごとにフラッシュ
  - 統一されたビューUNIFIED\_AUDIT\_TRAILから監査データを参照
    - ・ 元データとなるAUDSYS.CLI\_SWP\$\*テーブルは読み取り専用
  - Data Pump / SQL\*Loaderの実行も監査可能



# Unified Auditing

## 監査ポリシーの作成

監査ポリシーを作成するにはCREATE AUDIT POLICY文で行う。複数の監査対象を単一のAUDIT POLICYに指定可能。

- ・ 権限の監査

CREATE AUDIT POLICY ポリシー名 PRIVILEGES システム権限, ...

- ・ ロールの監査

CREATE AUDIT POLICY ポリシー名 ROLES ロール, ...

- ・ アクションの監査

CREATE AUDIT POLICY ポリシー名 ACTIONS オブジェクト権限 ON ...

CREATE AUDIT POLICY COMPONENT=DATAPUMP, DV, DIRECT\_LOAD, ...

- ・ 条件を指定するWHEN句等を指定することができる



# Unified Auditing

## 監査ポリシーの有効化と確認

監査ポリシーを有効化するにはAUDIT POLICY文で行う。

- ・ ポリシーの有効化

AUDIT POLICY ポリシー名

- ・ ポリシーの確認ビュー

AUDIT\_UNIFIED\_POLICIES

ポリシー情報

AUDIT\_UNIFIED\_ENABLED\_POLICIES

有効化されているポリシー情報



# Unified Auditing

## 標準で有効になっている監査ポリシー

ポリシー名	設定	対象	成功	失敗
ORA_SECURECONFIG	ユーザー、 ロール、 プロファイル、 PDB、 データベース・リンク、 パブリック・シノニム、 監査、 ディレクトリ等の作成／削除／変更等	全ユーザー	YES	YES
ORA_LOGON_FAILURES	クライアント接続	全ユーザー	NO	YES



# Patch Set 12.1.0.2 情報



# Patch Set 12.1.0.2 で追加された機能一覧

新機能 (参考 [https://blogs.oracle.com/otnjp/entry/database\\_12c\\_new\\_feature](https://blogs.oracle.com/otnjp/entry/database_12c_new_feature))

Advanced Index Compression	PDB File Placement in OMF
Approximate Count Distinct	PDB Logging Clause
Attribute Clustering	PDB Metadata Clone
Automatic Big Table Caching	PDB Remote Clone
FDA Support for CDBs	PDB Snapshot Cloning Additional Platform Support
Full Database Caching	PDB STANDBYS Clause
In-Memory Aggregation	PDB State Management Across CDB Restart
In-Memory Column Store	PDB Subset Cloning
JSON Support	Rapid Home Provisioning
New FIPS 140 Parameter for Encryption	Zone Maps
PDB CONTAINERS Clause	



# Patch Set 12.1.0.2で追加された初期化パラメータ

## 初期化パラメータ

common_user_prefix	inmemory_max_populate_servers
db_performance_profile	inmemory_trickle_repopulate_servers_percent
DBFIPS_140	instant_restore
enable_goldengate_replication	java_restrict
inmemory_size	optimizer_inmemory_aware
inmemory_clause_default	pdb_os_credential
inmemory_force	pdb_lockdown
inmemory_query	



# Patch Set 12.1.0.2で変更された初期化パラメータ

初期化パラメータ	変更点	12.1.0.1	12.1.0.2
resource_limit	デフォルト変更	false	true
compatible	デフォルト変更	12.1.0.1	12.1.0.2
optimizer_features_enable	デフォルト変更	12.1.0.1	12.1.0.2
sec_protocol_error_further_action	デフォルト変更	CONTINUE	(DROP,3) (マニュアルではCONTINUE)
sec_max_failed_login_attempts	デフォルト変更	10	3 (マニュアルでは10)
audit_sys_operations	デフォルト変更	false	true (マニュアルではfalse)
log_archive_local_first	削除		
parallel_fault_tolerance_enabled	削除		

マニュアルと差異がある初期化パラメータはLinux x86-64版で確認。



# Thank you

